

「ユートピア」物語のすすめ

『二〇〇五年ユートピアからの便り』

——国連軍女性兵士の日本見聞録——

二〇〇五年五月二〇日

あるとき、長い間禁欲的に歴史研究をつづけてきた友人が「もうそろそろ自分の思うところを社会に向けて積極的に発言しようではないか」とぼつりと語った。人生は短い、禁欲的に生きつづけるだけでは、自分を本当に表現できはしない、という趣旨で語られた言葉であったように思われる。同じように酒もタバコも冒険も知らずに研究をつづけてきた私の胸に、その言葉はぐざりと突き刺さった。四十の半ばを過ぎて

塚 田 富 治

動かず、このまま大学の研究室で朽ち果てるよりも、明晰で研ぎ澄まされた言葉を武器に激動する歴史の舞台で何らかの役割を格好よく演ずることこそが、自分の本分なのだ。

しかし興奮はそこまでだった。長い修道士のような生活の結果、私は激動する世界情勢を分析し、そこに生きる人々に助言を与えようような深い理論も思想も育むことがなかったからである。今私は禁欲的に研究をつづける意欲をなけば失いかげ、歴史の流れを横目にしながら、ただぼんやりと夢想するだけである。それはたとえば、眠れぬ夜などには次のような形をとって現れる。

父上様

大学を終え、国連軍に志願した私にたいする父さんや母さんの気持ちを理解していなかったわけではありません。しかし心配はなさらないでください。私が考えていたとおり、ここは素晴らしい場所です。私たちが求めて、ついには手にすることができなかったものが、あるいは私たちの怠慢さ、傲慢さゆえに求めようとすらしなかったものが、ここにはあります。それも溢れるばかりに存在するのです。何からお知らせしたらよいのでしょうか。何もかも一時にお知らせして、父さんや母さんをすぐにも安心させたい気持ちで一杯ですが、正確なお知らせしたいので、少しづつ丁寧に書いていくことにします。はじめは今がいるこの場所、国連軍の基地についてお話ししたいと思いません。

十数年前、ジャパンが国連軍のための資金を全額提供し、同時にアジア地域における基地の提供をも約束したとき、世界の国々はその実効性とジャパンの真の

意図を疑いました。しかし父さんもご承知のように、それはわがアメリカ合衆国から一方的な安全保障条約の破棄と在日合衆国軍の撤退に直面して、ジャパンがとりうるきわめて現実的な選択の一つだったのです。このある意味で必要に迫られてとられた政策が、十数年たってきわめて理想的で、創造的な制度として結実しているのを目の当りにして、私は驚きを隠すことができません。

厚木の国連軍基地にはじめて第一歩をしるしたとき、私はそこが軍隊の基地であることに目を疑いました。それは緑豊かな学園のキャンパスのような印象を与えたのです。それもそのはずです。ここには国連大学の分校が併設され、国連軍兵士は一年の半分をこの大学で学ぶことを義務づけられているのです。私はいま四年前、ハーバードに入学したときのようなフレッシュな気分で、講義や実技に参加しています。

大学のカリキュラムは、社会・人文・自然の三つの科学から構成されるユニットと体育・医療についての科学から構成されるユニットとの二つからできていま

す。平和学は必修科目で、私は今エラスムスの『平和の訴え』を読んでいます。兵士の私がエラスムスを読むなんて、少し変な気持ちがありますが、それでも私はそれがすっかり気に入っているのです。政治学、経済学、言語学、環境科学、すべての講義が平和という観点から行われているのがここでの教育の特徴です。

体育の実技も私のお気に入りのひとつです。大学でのカリキュラムの半分を占めるこの体育の時間はとても充実しています。私たちはかりそめにも軍人なので、すから、これは当然のことなのでしょう。基礎的な体力を養うための陸上競技や水泳、団体精神を養うための各種団体競技はもちろんのこと、エアロビックスから社交ダンスまで、幅広い選択肢を私たちはもつことができます。私は今世界的に有名な女性柔道家イノクマ・ヤワラから、一本背負いの秘技を盗もうと毎週彼女のもとで柔道を学んでいます。

医療についても基礎医学から看護や簡単な救急医療の実践までを私たちは習得しなければなりません。これは私にとってはかなりつらい仕事ですが、一人前の

国連軍兵士となるためにはこなしていかなければならないと気持ちを引き締めています。私たちは、まるでプラトンが描いた理想国家の守護者身分にたいするような教育を受けているというわけです。

ところでこの体育実技のための施設について驚くべき事実を発見しました。実技は開閉可能なドーム式運動場で行われているのですが、トラックやフィールドの下には無数のローラーが敷設されています。そのローラーをおして、私たちが使うエネルギーは、ドーム内の照明や屋根の開閉を可能とする電力へと転化されるのです。この国では省エネが徹底しているのです。話はすこしありますが、五月のさわやかな朝、散歩の途中ではほほえましい光景をいくどか目にしました。ジョギングをしている若者たちが王室の方々が使われるコーチのような車を引いて走っているのです。車には一組のお年寄りが乗り、早朝の緑を楽しんでいました。後で聞いたところによれば、ジョギング・エネルギーを有効に利用するための制度だそうです。このような効率的な人力エネルギーは、健康のためと称して、過

食によって肥満した体に激しい運動を強い、また代々ジョギング好きの大統領を抱えるわが合衆国国民には、きわめて有望な将来のエネルギー源となるのではないのでしょうか。

国連大学は、国連軍が駐留する沖縄、岩国、熱田、厚木、八戸すべてに付設され、世界の一流の学者を招いて講義が行われています。とても奇異に思われるのは、日本人の教師がここには一人も存在しないことです。日本の学者や研究者は、国連軍が目指す世界平和に貢献するような研究や教育ができないということなのでしょう。残念に思われてなりません。

そういう訳ではないでしょうが、この国連大学の特別コースを日本のすべての大学生は一年間の必修コースとして、受講することを義務づけられています。彼らのほとんどは、はじめのうちは語学力の不足や日本人学生に特有の怠惰・無気力のために講義を理解しようともせず、またそもそもできませんが、国連軍兵士の真剣で、なおかつ快活な態度に接するうちに大きく変わっていきます。彼らは世界市民としての自覚をも

つようになり、それに応じて彼らの語学力は争速に伸び、また平和のための学問・研究にたいする理解も増していくのです。

私はガ克蘭とよばれる異様な黒い詰襟のユニホームを着た日本の学生と机を並べることになりました。彼は過激なナシヨナリストで、講義をさばり、ときには奇声を発して講義を妨害することさえありました。

しかし多様な言語が優劣の区別なく使われ、また多様な民族・国民文化がたがいに尊重、受容される、しかもそれら多様なものが、世界平和という共通の目的を指しているこのキャンパスの中で、彼は次第に私たちに心を開くようになりました。今では彼は私に空手を教え、私は彼に英語の手ほどきをしています。平和学担当の教師が言われたことですが、かつては強烈なナシヨナリストであった日本人学生の多くが、ここでこの教育を終えた後で国連軍に志願するようになるそうです。

それでは国連軍が駐留するまで世界第五位の強大な軍勢力としてこの国を防衛し、かつ近隣の諸国に脅威

を与えていた自衛隊はその後どうなったのでしょうか。忽然と姿を消した軍隊として世界の注目を浴びてからすでに十数年がたっていますが、私はその変貌ぶりを目の当りにして驚きを隠すことができませんでした。本当に私はこの国にきて以来、驚くことばかりの連続です。

十二年前、自衛隊の陸・海・空の三軍は解体され、地球環境防衛隊と農地・森林防衛隊の二つの部隊に編成され直しました。地球環境防衛隊は海洋汚染、大気汚染、地表の砂漠化などの原因を調査・研究し、その解決策を探る基礎研究部門と、海洋汚染や油井火災の現場に赴きその処理や被災民の救済に当たる実践部門の二つにわけられました。

ジャバンの技術応用力はこの面でも驚異的な力を發揮しました。地球環境防衛隊付属研究所は世界でも多数の研究・発明機関として知られるようになっていますが、そこでは戦車や戦艦を改良して、油井火災消火戦車と流出石油回収艦が製作されました。廃棄物として打ち捨てられていた旧ソヴィエト連邦の戦車や戦艦

のほとんどが、この研究所の手によって改良されたことは、父さんもご存じでしょう。海洋を汚染する石油を船首のヴァキューム取り入れ口から回収し、同時にその石油を浄化・精製して艦のエネルギーとする、このとてもない改造戦艦は二十一世紀最初の偉大な発明と言ってよいでしょう。

現在世界のどの地域においても嵐のような歓呼の声と共に迎えられるただ一つの部隊は、ジャバンの地球環境防衛隊です。私たち国連軍もこの部隊には引けを取ってしまいます。隊員の献身的で誠実な働きと優れた技術力は、災害に苦しむ人々にとっては神的です。ある存在なのでしょうか。こうしたことは人間だけに限られることはありません。海洋に投棄された石油で汚染され、息も絶え絶えとなった海鳥やイルカでさえ、地球環境防衛隊員の緑のユニフォームを見つけると、歓喜の鳴き声をあげて彼らに向かってくるということなのです。

世界の至るところで地球環境防衛隊員の銅像やレリーフが見られますが、それらは彼らが人々からどれほ

ど尊敬され、感謝されているかを雄弁に物語るものなのです。それらは一命を抛ってまで献身的に地球環境を守り、また災害に苦しむ人々に救助の手を差し延べた隊員をいつまでも忘れずにおこうという意図で自発的に建立されたものなのです。

もう一つの部隊、農地・森林防衛隊は最初はおっぱらジャバ国内で活動していました。一九九〇年代ジャバンの農村は急速に荒廃していききました。農業人口の減少、農産物輸入自由化の脅威、ゴルフ場を中心としたリゾート地乱開発、そして農地にたいする宅地並課税などによって田園、山林地帯の生き生きとした自然の緑は、急速に失われていきました。農薬づけの人工の緑、そして投機の対象として打ち捨てられた農地。こうした状況が進む中で、衝撃的な事件が起こりました。農協の青年幹部と地方農村出身の自衛隊員による緑のクーデター計画です。筵旗と十トンの兵糧米だけで武装した五百人の反乱軍兵士は農林省を一ヵ月間にわたって占拠した末に、空腹のあまり全員が無条件投降することになります。この事件はジャバンの

人々に深い衝撃と覚醒を与えることになりました。それは農地・森林防衛隊の創設につながるようになるのです。現在部隊の中核となっている幹部隊員のほとんどが緑のクーデター参加者であることは、彼らの理念が国民の支持を受けていたことを示しているでしょう。緑の部隊の機動力によって、それまでは老人と女性の手にかけていた非効率的で、貧弱なジャバンの農業と林業は飛躍的に、しかも安全に改良されました。目を見張るばかりの眩い緑の田園と豊かで安全な農産物、これだけでもジャバンはユートピアと呼ぶに値する国であると私は思います。

この部隊の緑復活はきわめて作作的ではありませんが、私たちの目にはけっして人工的な印象を与えることはありません。彼らはジャバンの伝統的な技芸である造園術——庭師の技芸——を、緑復活のプロジェクトに用いたのです。手入れの良く行き届いた広大な山林を背景とし、自然の地形を生かして巧みに水路を配した田園は、すべてがすべてわが合衆国の基準にてらせばナショナル・パークとしての榮譽を勝ちとるにふ

さわしいものなのです。この美しい田園で父さんの大好物のコシヒカリが生産されているのです。

そしてここはたんなる農業地帯ではありません。このような豊かな自然は、農業以外の産業に従事する人々をも引きつけずにはおかないのです。そのことについてはまた後の便りでお知らせすることにしましょう。ともあれ、農地・森林防衛隊の働きによってジャンの農業は、大量機械化・大量農薬散布方式によって土壌をすっかり疲弊させ、また地球の温暖化の影響を受け、わずかな種類の雑穀と肉牛しか生産できなくなった合衆国の農業を補完するほどになっているのです。

緑の部隊がやがてわが合衆国の疲弊した農地を豊かな田園に変えてくれることを私は信じて疑いませんが、そのときがくるまでわれわれはジャンからのコシヒカリの輸入に頼らねばならないのです。十数年前、世界戦略的観点からわが国が、ジャンを食糧輸入に依存する国に変えようとして、変ええなかったその失敗がこのような形でわれわれの恩恵となっている歴史の

皮肉をここにきてつくづくと感じさせられます。

すこし長くなりました。また便りします。

カレン・ユキ・モア

夢想はアミーバーのごとく無限に増殖していく。とはいえ、今を生きる若き学生にとって孤独で社会性も失った元・禁欲的研究者のユートピアなどは非生産的なものにすぎないであろう。右であれ、左であれ、現実を把握する精緻な理論をもち、硬い思想と信念をもって人々を導いてくれる社会学者の生産的な論文こそ、この場にはふさわしい。この辺で筆をおいた方がよいであろう。

* 「ユートピア」の擁護

「これは一体なんだ！」。がまんを重ねて、ここまで読みつづけてきた読者の正直な感想であろう。そして専門としての社会科学を学ぼうとする情熱と意欲をもつ新入生たちは、こんなものを読まされたことで意気阻喪し、社会科学の若き司祭たちは憤り、叫ぶかもし

れない。「だから人文科学を研究しているやつらはだめなんだ。現実から遊離したユートピアなど社会科学を専門として学ぶ者になんの役に立つのだ」。

もちろん良識ある最高学府でこんな叫びは聴かれるはずもないが、この叫びには「ユートピア」物語など社会科学を学ぼうとする者にとっておよそ無益であり、有害ですらあるという理解(誤解)がこめられている。そして「ユートピア」物語などという道草など食わずに、すぐにも専門としての社会科学を学べきである、とつづくことになるであろう。

だが現実社会を分析し、解明する社会科学、あるいは現実社会の進むべき道を示唆する社会科学と「ユートピア」物語ははたして無縁なのだろうか。冒頭の「ユートピア」物語を読むことで、読者の幾人かは日本の防衛、あるいは日本の農業が抱える現実の問題点をすこしは垣間見ることができたかもしれない。そして実現不可能とは思いますが、日本の進むべき方向についてなんらかのヒントを手にとれたかもしれない。拙い作者が勝手にそう思い込むのは、はなはだ不遜で

はあるが、たとえすこしでもそうした読者が存在するとすれば、作品の意図は伝わったことになる。

筆者にかんしてはさておくとして、「ユートピア」物語の作者のおおくは現実にたいする深い洞察力と現実を導くべき指針を提示しうる思想や理論をもっている。その意味ですぐれたユートピア作品の中に、注意深い読者であるならば専門的な社会科学にとって有意義で豊富な情報を発見できるはずである。ユートピア作品にたいする誤解を解き、その意義をわかりやすく説明するには、多少乱暴な文章ではあるが、次の一文にまさるものはないであろう。

これを読んでいるあなたもユートピアと聞くと現実逃避的でSF的で***児童的で***非ニスサークル的で文化部的な青臭く陰気なものを思い浮かべる**のひとりだろうが、ユートピア研究とはそのようなものではない。実際はユートピア研究ほど健全明朗なものは他にないのだ。ユートピアを考えるにはまず現実を知らねばならない。現実を

知らねば非現実たるユートピアを構想しえぬからだ。この点でユートピアの作者ほど現実主義的なものはない。単なる夢想家では駄目なのだ。さらに、ユートピアを考えるには**の学生のように現実べったりではいけない。柔軟な想像力が必要となる。想像力がなければ現実以外の現実たる非現実たるユートピアを創造しえぬからだ。この点でユートピア研究ほどロマンチックなものはない。要するにユートピア研究に携われれば現実主義的ロマンチストになれるのであって、現実主義的ロマンチストこそどこに出しても恥ずかしくない健全な常識人の理想の姿なのである。

そのうえ、現実主義的にかつロマンチックに学問することほど楽しいことは**を除いては他にないときている。現実的なだけの商学法学経済学社会学、ロマンチックなだけの文学と異なりユートピア研究という楽園においてはこの世のありとあらゆる快楽と実益がおいでと手招きしているのである。

ユートピア研究にはさらに良いことがある。現実

を知るには商学法学経済学社会学といういわゆる専門的学問を学ねばならず、ロマンチックになるには小説・詩・音楽などを愛さねばならない。換言すればユートピア研究の名の下では何を学んでも許される⁽¹⁾ということである。

良心的な一橋大学生を激怒させたといわれるこの一文は、ユートピア作品が現実社会にたいする深い認識にもとづいていることを言い当てている。さらにまた——これこそがユートピア作品の真骨頂なのであるが——ユートピアが現実を越えうる想像力にも支えられていることを言っている。このことは二つの意味をもつ。一つはその想像力が現実に向向性を与えうる、あるいは現実そのものを変革・発展させうる理論や理想を作りうるということ。そして社会科学とユートピアの関連というコンテクスト上からはより重要な意味をもつものであるが、二つめは想像力によって生み出されたユートピアがわれわれの目の前にある現実をすぐれて相対化することである。ユートピアという非現実

を比較の対象としてもつことで、現実の中にとりこまれてしまっていた読者の視線は一時、そこから解放されて、自由を回復する。このようにして生まれた自由な視線は、現実にたいする理解を相対化し、またそれらにたいする理解をそれまでよりもずっと深く、しかも客観的なものとする。

*社会科学とユートピアは兄弟

こうしたプロセスをおしての現実認識は、じつはこれこそが社会科学といわれているモデル、あるいは理念型を構築して現実を理解しようとする理論経済学をはじめとする様々な人間社会についての諸理論にもまた「過去に現実起こったことについての純粹に歴史的な報告」を標榜するスキナー流の歴史学にも共通するものなのである。

経済学について筆者のような者が語るのは、せん越もはなはだしいかもしれないが、厳密に定義づけられたツールとしての概念によって組み立てられた経済モデルは、現実の経済の正確な描写などではもちろん

ありえないし、またおよそ現実にそのまま役立つような代物ではない。⁽²⁾たとえば経済学のテクストのうかつな読者は、資本制経済についてのきわめて分かりやすい説明された記述を読み、現実の資本制経済とはなんであるかを知ったつもりになる。合理的な営利活動によって蓄えられた資本、自由な主体としての労働者、自由かつ競争的でもっとも効率的な経済活動を保証する市場、合理的な選択によって最大限の満足をえようとする消費者など。これらのものから、たとえば資本制経済の循環現象を解き明かそうとする場合、経済モデルは「資本―賃労働関係、生産の決定権を握っているのは資本家である」という具合になるだろう。

しかしこのようにきれいに説明された諸要素が現実にもそっくりそのまま存在すると考える者は、またそれらによって作られるモデルが現実の経済現象を表していると考ええる者は、いまやほとんどいないであろう。資本家が悪辣な方法で蓄財している事例は数限りなくあるだろうし、過剰宣伝に操られて必要でもない粗悪な商品を買わせられる消費者も多い。

同じことが政治学についてもいえる。近代民主制の理論は、自由で独立した、しかも公共の問題を正確な情報にもとづいて理性的に判断し、行動する政治主体としての個人を大前提としている。大衆社会、巨大社会、あるいは管理社会などの新しい状況が生まれるたびに、この大前提に対する疑問が提起され、修正が試みられてはきたが、現代においてもこの大前提はしぶとく生き残っている。しかし、すこしでも自らを振り返ってみれば、われわれは日々生まれる複雑で、身近とはおよそいえない公共の問題すべてにたいして、——いやそのひとつにたいしてすら——理性的に判断して、行動することのできる個人など存在しないことが、すぐにも理解できるはずである。

もちろん多少は専門としての社会科学をかじったことのある筆者は、有能な新進の経済学者や政治学者がこんな単純なモデルばかりを作っている訳ではないことを知っている。両研究分野において、入り組んだ現代社会を説得的に(?) 解き明かすようなより精緻なモデルが次から次へと構築されているのはまぎれもな

い事実である。ここでこのような単純なモデルをあえて示したのは、無知や悪意からではなく、単純なものですらも現実の認識に大いに貢献することを示したかったからである。

あまりに単純なモデルを例としてしまったが、このように経済学や政治学がモデルを構築するさいに、その構成要素とする概念は、およそ現実にはそのままの型では存在しない——その意味ではユートピアの住人やその諸制度のような——理念型なのである。しかしそのことは、経済学や政治学の理論を無意味な空論として斥ける理由にはけっしてならない。それはきわめて錯綜した現実の経済現象を映しだす曇り一点ない鏡としての役割を果すからである。経済学徒はこのモデルを比較の対象としながら、現実を見ることで、現実がいかなる点で錯綜しているかをも含めて——それはとりもなおさず現実の固有性なのであるが——現実の姿をより客観的に理解することが可能となるであろう。理念型、あるいは純粹モデルとしての資本制経済、あるいは民主制を学んだものは、それを比較の尺度とす

ることで現実の資本制経済、現実の民主制を相対化し、その細かなひだの部分に至るまでより良く理解できるようにするのである。

*歴史学はユートピアの姉妹

同じことがこれまでの歴史学の批判のうえに成立した(古くて)新しい方法論にたつ歴史学の成果についてもあてはまる。その旗手の一人で、思想史の領域でこの方法を駆使するスキナーの出発点は、対象に取り組む以前に存在する研究者の「心の構え」、「先入見」、日本の研究者の多くが好んで用いる言葉でいえば「問題意識」があまりに影響力をもち過ぎることにたいする批判であった。スキナーによればこのようにして進められる歴史研究は、「無害な歴史的考察のもとに、自分の偏見をカリスマ的な名前と結びつける手段」と成り下がり、「およそ歴史とはいえない代物」を生み出すことになる。民主主義を戦後日本にいか根づかせるべきかという良質の問題意識から生まれたロックを「人民主権の提唱者」、あるいはホップズを「近代にお

ける最初の民主主義思想家」とする画期的な歴史研究などはその恰好の例であろう。⁽³⁾

こうした問題意識の突出した歴史研究にたいしてスキナーは思想史を例として、歴史研究の意義がそれは別のところに見いだされることを主張する。「古典的テクストが、なにか訳の分からない理由からしてわれわれ自身の問題ともかかわっている、などという憶測ではなく、それがわれわれとはまったく異質のそれ自体の問題とかかわっている、というまさにその事実こそ、私から見れば、思想史研究の本質的な意義に疑問を投げかけるどころか、むしろそれを明らかにする鍵を与えるものと思われる」。スキナーが試みるのは、われわれが目の前に行っている現実とはまったく異質の過去の現実を、根気のある作業をとおして忠実に過去の実像として再現することである。

こうして再現されたわれわれが生きる二〇世紀後半の現実とはまったく異質の歴史像は、現実世界から隔絶された空間に存在するユートピアとはほぼ同じ緯度にあるといっても言いすぎではない。その意味でこの歴

史の実像は、ユートピアの諸制度や社会科学の諸理念型、あるいはモデルと同じように比較の対象となることで、現実を相対化し、そのより深い理解へと導く手助けとなるのである。すなわちわれわれのものは異質な歴史の実像を鏡とすることで、われわれは自身をとりまく現実の固有性を発見でき、しかも社会がそれとは自覚されないままにわれわれに課している拘束からわれわれを自由にするのできるのである。

さて読者はこれまでの記述から、ユートピア物語が真正の社会科学ややりの歴史学と同じように、われわれを取り巻く錯綜した現実の理解を助ける有効な方法であることに気づかれたであろう。ここにさらに、とりわけ社会科学の若き司祭たちから異端視されている小説や戯曲などの文学を加えてもけっして勇み足とはならないであろう。ご存じシェイクスピアがブルータスの口を借りて主張するように、「目はおのれを見ることができぬ、なにかほかのものに映してはじめて見える」のである。「きみ自身まだ知らないきみの姿を」、そしてきみを取り巻く現実の姿を「あるがままに

きみに見せてやる」ことのできる鏡、そうした鏡は専門的社会科学型の鏡や歴史の実像型の鏡ばかりでなく、ユートピア型鏡、小説・戯曲型鏡をも含めて、できる限り数多く取り揃えておくのが賢明であることにまちがいはない。一面より二面、二面より三面鏡のほうがわれわれ、およびわれわれを取り巻く現実を奥行き深く映しだしてくれるからである。

*ギャグのとくいな兄弟ユートピア

さてユートピア物語の擁護はこれくらいとして、つぎは他の諸鏡にまさるユートピア物語のすごさを宣伝しておこう。冒頭の「ユートピア」物語の偏見のない読者は、読書中に不謹慎にもニヤリと笑ったり、思わず「おもしろい」と叫んでしまったかもしれない。隠さなくともよいのです。ユートピア物語は「おもしろい」ギャグ(5)であふれているのですから。またもや筆者の不遜な態度が顔をのぞかせてしまったが、読者のうちの一人でも頬をゆるませてくれたら、ユートピア作家としての筆者の意図は伝わったといえる。黄金の便

器や結婚前男女の性器の見せ合いなど、モアの『ユートピア』にてでくる卓越したギャグ、あるいは井上ひさしの『吉里吉里人』でこれでもかと繰り返されるサーヴィス過剰気味のギャグにははるかに劣るが、ジョーキング・エネルギーの動力化やアメリカ合衆国のコシヒカリの輸入などは風刺のきいたギャグ——またまた不遜であるぞ——として読者一人くらの苦笑を誘ったのではないだろうか。

そしてその笑いは次の瞬間、食糧資源の浪費によって肥満した身体をエネルギーの浪費によって元に戻そうとする愚行、あるいは世界規模での食糧不足やそれに拍車をかけるにちがいない農地の砂漠化を目の前にしながら、世界の農業を衰弱化させようとするアメリカ合衆国、その食糧メジャーの戦略の危険さにたいする暗澹たる理解に変わっていくのではないだろうか。

しかしこうした理解が有益でないはずはない。「おもしれー」と快楽を味わいながら、ときに暗い気持ちに襲われることにもなるが、現実社会にたいする認識の手掛かりをもてるユートピア物語にはすごい仕掛が

してあったのである。筆者がユートピア物語のすごさとして宣伝したいのは、この快楽と有益さを兼ね備えた点にある。モアの『ユートピア』の正確なタイトルは『社会の最善政体について、そしてユートピア新島についての楽しさにおとらず有益な黄金の小著』であり、その宣伝文は「真実を蜂蜜で味つけしたように楽しく流し込ませるフィクション」であった。⁽⁶⁾

新入生諸君に「ユートピア」物語を薦める理由は、この楽しみながら有益な認識に到達しうる点にある。社会現象を解剖することのできる鋭利なメス、無機質に光るトゥールに慣れることが必要なことはいうまでもない。しかし他方で、蜂蜜で味つけされた「ユートピア」物語、そして人間および人間社会を理解するために役立つ七つ道具を提供してくれるはずの小説や戯曲などに接することも、おそらく人間のおよび人間社会的な一切のものを捨て、またそれらのものから捨てられて大学生準備生活を送ってきた新入生諸君のリリースのためにも、とりわけ必要ではないだろうか。この大学で、あえてもう一度「ユートピア」物語を薦め

るゆえんである。

さて前置きがいささか長くなりすぎた。本題に入って冒頭の「ユートピア」物語を商学経済学法学社会学の知識を駆使して、分析することにしよう。このユートピアの作者は、現実をどのように診断し、どのような処方箋を与えようとしているのか。

と、ここまでワープロを打ちつづけてきたところで、筆者は自分に許された字数をすでに越えていることに気づいてしまった。はなはだ無責任ではあるが、「ユートピア」の解体は読者諸氏におまかせすることをお願いして、ワープロを打ち終えることにしよう。

(1) 『一九九〇年度後期ゼミナール紹介』、五七頁。引用文の執筆者の反対にもかかわらず、筆者の研究者としての立場を考えて固有名詞、性的表現などについていくつかの箇所を伏せ字とすることとした。

(2) この意味で、経済学は実学でも、ましてや「金儲けの学問」でもなく、社会科学の中でももっとも芸術的ですからある学問なのである。

(3) スキナーの方法論についての分かりやすい解説は、

拙著『カメレオン精神の誕生』（平凡社 一九九一年）、およびスキナー著・拙訳『マキアヴェツェリ』（未來社 一九九一年）の「あとがき」を参照。また本格的に学びたい者にはスキナー著・半沢他編訳『思想史とは何か』（岩波書店 一九九〇年）をお薦めする。

(4) シェイクスピア著・小田島雄志訳『ジュリアス・シーザー』（シェイクスピア全集3 白水社 一九七五年）一三八頁。

(5) 「ギャグ……演劇・映画などで、本筋の間にはさんで客を笑わせる場当たりの文句。いれざりふ」（『広辞苑』）。ユートピア作品の中の「おもしろい」部分は、作者が綿密な戦略のもとで、作品中に組み入れたものであるものが多いので、ギャグという言葉はすこし不正確であるかもしれない。

(6) モアの『ユートピア』のこうした側面についての学問的な説明は拙著『トマス・モアの政治思想』（木鐸社 一九七八年）、一三九—一四九頁を参照。

（一橋大学教授）